

1996年ベルリン国際映画祭銀熊賞受賞

もどめていたのは恋人じゃない、*「私の男」*。

*ANOUK GRINBERG*

*VALERIA BRUNI TEDESCHI*

*GERARD LANVIN*

# 私の男

ベルトラン・ブリエ監督作品 アヌーク・グランベール×ジェラルド・ランヴァン×ヴァレリア・ブルーニ・テデスキ

出演：マチュー・カゾヴィッツ、オリヴィエ・マルティネス、サビーヌ・アゼマ、ジャン・フリップ、エコフェ、ジャン・ピエール・レオー 製作：アラン・サルド 脚本：ベルトラン・ブリエ 撮影：ピエール・ロム 音楽：ピエール・ガメ 衣装：クリスチャン・ガスク  
美術：ウィリー・ホルト メインビジュアル：サラムーン 挿入歌：バリー・ホワイト（収録CD「THE ICON IS LOVE」ポリドール） 後援：フランス大使館文化部 1995年 フランス カラー シネマスコープ 98分 原題：mon homme 配給：シネカノン

PHOTO: SAKURAI

精神的にも肉体的にも満ち足りた“幸せな娼婦”マリー。  
 そんな彼女が初めて“私の男”を選んだ理由とは……。

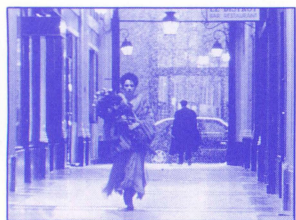


1996年ベルリン映画祭  
 銀熊賞受賞作品

# 私の男



「神様、素晴らしい贈り物をありがとう。」



女はみな“私の男”を待っている。

男たちに肉体的のみならず「愛」を与えることを天職の喜びとしてきたマリーが、ある冬の日、ひとりの男と運命的な出会いをする。「名前も知らない。過去も知らない。知りたいのは彼の肌。肌の1ミリ1ミリ。」マリーは男に懇願する。「私の男になって」。それはこれまで不特定多数の男と自由な関係を生きてきたマリーが、いわば初めて結んだ一種の“契約関係”でもあった。しかし恋人でも夫でもなく、“私の男”と呼べる相手を得たことで、マリーは不思議な安らぎを覚え、かつてなく満ち足りた幸せな思いに神に感謝の祈りを捧げるのだった……。

「——フランスでは娼婦は風土のひとつなのです。」

私は情熱的な娼婦の恋を描いてみたかった——。『ハルズズ』『美しすぎて』『メルシー・ラ・ヴィ』と、男女の激しい愛や性を描き次々に衝撃作を生み出してきたベルトラン・ブリエの最高傑作が、ここに誕生した。実生活では妻にあたる主演のアヌーク・グランベールは自由奔放で気高く、そして愛にあふれた“新しい娼婦”を演じ、見事96年ベルリン国際映画祭銀熊賞を受賞している。他にもマリーと同じ男を愛するネイル・アーティスト役に、『おせっかいな天使』でセザール賞最優秀新人賞を受賞したヴァレリア・ブルーニ＝テデスキ、そしてマリーの部

屋を訪れる男たちには監督としても人気絶好調のマチュウ・カソヴィッツを始め、ジャン＝ピエール・レオーなどフランスを代表する映画人たちが勢揃いし、重厚でいて大人のエスプリの漂う映画にスパイスを効かせている。またデカダンな雰囲気漂うマリーの部屋をはじめ、男たちに声をかける場所である“パッサージュ”などの建築物、女たちが身につけている豪華なキャミソールやコスチュームの数々など、物語に役も二役もかかっている小物たちにも目が離せない。



「すべてはこの一枚から始まった。」

この娼婦の写真が私に不思議な物語を思いつかせたのだ。ブリエ監督は、写真家サラ・ムーンによるアヌークの写真の一枚にインスパイアされたという。サラ・ムーンはアヌークが10代の頃から彼女を被写体に写真を撮りつづけており、本作のメイン・ビジュアルも、サラが映画のために撮り下ろしたものである。

1995年/フランス/カラー/98分/シネマスコープ/原題: Mon Homme

## 絶賛上映中!!

★レディー・ウェンズデイ(「私の男」公開中のみ)  
 毎週水曜日は女性は1,000円でご覧いただけます。

**Ciné la sept**  
 銀座 シネラ・セツ

JR有楽町駅中央口銀座側すぐ 03(3212)3761  
 土日祝 11:00 連日 1:00 3:00 5:00 7:00

至新橋 至有楽町  
 至四ツ目 至有楽町  
**Ciné la sept**  
 マリオン

●自由席・各回定員入替制  
 当日一般1800円/学生・会員1500円(税込のみ)  
 ※12/31日は3:00の回で終了、1/1日は休館致します。